

令和2年度 藤島高校 学校評価書

項目	具体的取組み	成果と課題	改善策・向上策
教育課程 学習指導 研修	生徒一人ひとりの個性・人権を尊重した教育活動を推進する。	「生徒の能力や個性に配慮した教育活動の推進」に対する教職員の取組み指数は100%という高い数値となった。教育活動を実践する中で、個々の生徒の個性や人権に配慮する姿勢が教職員の中に定着していることが伺える。	教職員については、さらに研修を充実させ、意識の高揚を図っていく。また、生徒についても授業・LH・学年集会など様々な機会を通して、人権尊重の意識付けを継続的に行っていく。
	「授業評価」を踏まえて、授業内容の改善・充実に努める。	教職員の授業改善や充実した教科指導への取組み指標は高い数値である。また、生徒の学習の取組み、授業や質問への満足度および保護者の満足度のすべての項目で目標数値に到達しており、授業改善への取組みが成果を上げている。授業内容の満足度の1年生の指数が他学年よりやや低いことが課題である。	各教科で、ICTを活用した授業や主体的で深い学びを目指した授業の実践に取り組み、教科内で教材や教科指導法を共有できる機会を設ける。
生徒指導	生徒の容儀端正化に学校全体で取り組む。	教職員の97%が適切な容儀指導を行っており、生徒の98%が容儀の端正化に努めていると回答している。保護者も98%が本校の生活指導に満足しており、目標を十分に達成している。今年度は、靴下・下着・カーディガン・男子の髪に関する容儀規定を、生徒の意見を取り入れながら見直すことができた。	容儀規定の見直しにおいて多様性を認める形となったが、生徒は概ね落ち着いた服装をしており、容儀規定の見直しはうまくいった。今後も、いろいろと生徒の意見を聞きながら、時代に合わせて見直しができることは見直し、伝統を守るべきところは守っていきたい。
	いじめの未然防止と早期発見、早期解決に学校全体で取り組む。	「いじめの未然防止に努める」「いじめの早期発見と早期解決に適切に取り組む」の両項目とも、教職員の100%が取り組んでおり、目標を十分に達成している。今年度は新型コロナウイルスの影響で休校期間があり、生徒の様子を把握しづらい状況だったが、Google Classroomなどを利用することで、予想していた以上に把握できた。	SNSが普及し、高校生はそれを巧みに利用する状況で、いじめはいつ起きても不思議ではない。今回の結果に安心することなく、いじめが起こらないように、起きた場合にはすぐに対応できるように、生徒一人ひとりの状況を把握するように声掛けをしていく。
進路指導	面談や進路行事などを通して、生徒の進路に関する考えを深めさせる。	教職員の100%が進路指導に十分に取組み、生徒の93%が進路について十分に考えることができ、保護者の96%が本校の進路指導に満足していることから、本校の進路指導体制は全体的に整っているといえる。進路行事の時期や内容などを検討し、1・2年生の「1はい」の割合をさらに高めたい。	進路指導部・学年会・教科会と連携しながら、多様化している進路希望に応じて、生徒一人ひとりにきめ細かい指導ができるように、資料や情報などを提供する。また、進路オリエンテーションや、オンラインを活用した講演会や座談会などの進路行事の振り返りを通じて進路について考える機会を作る。
保健管理	担任、保健部、専門家の連携により、健康管理と教育相談活動を充実させる。	取組み指数、成果指数、満足度指数ともに目標値を上回る状態が継続している。相談室や学年会を中心に教職員の間にカウンセリングマインドが定着している。その取組みを生徒・保護者の多くが評価をしている。課題は、問題が生じてからの治療的な対応だけでなく、問題を生じさせない学校づくりを学校全体の課題として進めていくことである。	「先生が相談に親切に対応してくれている」とすべての生徒が感じ、成果指数が100%となるように、教職員のさらなる意識向上のための情報発信を行う。問題を生じさせない学校づくりのための提言、情報発信なども積極的にを行う。
環境美化	学校全体でゴミの減量化と環境美化に取り組む。	「積極的に清掃に取り組んでいる」とする指標について、本年度は除菌の意識も加わり、教職員が98%、生徒が86%と高い。課題は、生徒の14%弱が清掃に積極的でないので、この部分を向上することである。ゴミの分別に関しては、教員・生徒ともに90%を超え目標指数を上回っている。	清掃委員会・生徒会執行部と連携することで、清掃活動が自主的な活動となるよう、生徒の意識をより高める。ゴミの減量化については、「校外から持ち込んだもののゴミは各自で持ち帰る」という原則を再度徹底させる。
図書	図書館行事や広報活動を充実させ、生徒の読書意欲を喚起する。	年度初めから2ヶ月の休校期間があり、1年生での「図書オリエンテーション」ができなかったため、1年生で「はい」「どちらといえばはい」の回答が昨年の半数になってしまった。そのため生徒全体でも50%をわずかだが切るようになった。教員の中でも、昨年度より「はい」の比率が低下している。休校で図書館等の利用がしにくくなったことがうかがえる。	特に生徒への働きかけが必要で、以下の3点を重点的に取り組んでいく。①図書館関係の案内や新着図書案内をクラッシー等にアップしていく。②現1年生に対しては、学年末の特別時間割の期間に、図書館の利用法などの指導を行う。③朝読書週間等で落ち着いて読書に入ることができるように、読書に気持ちを向ける環境を整備する。
情報	校内ネットワークおよび情報機器の充実と利用促進を図る。	「校内ネットワークおよび情報機器を利用して、教育活動の効率化・充実化を図っている」ということに対し、「はい」または「どちらかといえばはい」と回答した教職員が98%になっている。7割近くの教職員が、「はい」と回答しているので、意識は高いと言える。	GIGAスクール構想による生徒一人一台のタブレット配付に向けて、研修等を行っていく中で生徒に向けての指導が行いやすいようにする。それ以外でも、より使いやすく、わかりやすい設定を心がけることで、積極的にネットワークおよび情報機器を使ってもらえるようにする。
保護者との連携	保護者と連携して教育活動を行うために、PTA活動や連絡を充実させる。	教職員の100%、生徒の約90%が保護者への連絡を十分にっており、相互の連携は図られていると考えられる。保護者に関しても、90%以上が教育活動や連絡を十分理解しており、学校の理解促進の取組みに満足している。昨年度同様、すべての項目が判定基準の目標値を超え高評価である。	学校の教育活動を十分理解していただくように、保護者への広報・連絡方法の改善の検討を継続していく。保護者への広報のために、PTAのホームページの充実につとめる。全教職員に、保護者と連携して教育活動を行うことの意義を常に意識するよう働きかける。
企画研究	SSHの研究課題の達成に向けて、学校設定教科「研究」を充実させる。	生徒の取り組む態度や満足度は高い。一度行ったプレゼンテーションを再度検討する単元の新設、ルーブリックの作成および形成的評価を工夫し、アフターコロナ社会について論じあう単元を今年度新設した。	先輩から後輩に研究をアドバイスする「研究ブリッジ会」の実施および論文・ポスター制作の指導過程を教職員が共有することで、「研究力」を高めていく。教養テキストと教科の関連が分かるキーワード集を作成し、教科横断的授業づくりに資するものとする。
	SSH研究を学校全体の取組みとして位置付け、研究体制を充実させる。	教職員の91%がSSHの取組みは学校全体の取組みとなっていると回答しており、担当者打合せ会でも授業内容の熱心な検討が行われている。また、自発的に企画・研究を実施する若手が増えつつあり、カリキュラム開発や授業改善等が充実・定着しつつある。コロナ禍中において、遠隔ツールを用いて卒業生を活用する企画が増え、研究Ⅰ公開授業を2回実施し、課題研究の基礎固めの実践例を校外に発信した。	例年約7割の教職員が「研究」を担当し、2～3年に一度はほとんどの教職員が「研究」等のSSHの教育活動に携わっている。今後は、授業改善や研究の成果をさらに定着させていくと同時に、これらの取組みを他校に発信し、交流を通してより質の高いものとする。